
なんで僕の周りには変人と変態が集まるのだろう？

のんきな人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんで僕の周りには変人と変態が集まるのだろう？

【Nコード】

N8619V

【作者名】

のんきな人

【あらすじ】

「はじめまして。私は、神々に愛されている男こと杉下真二とい
います。この物語は僕と変態が人助けをする、というモノです。」
「その変態とは俺のことだ。おはようじよから、ロリこんばんわま
で、くらしに妄想をひろげるROROKONの提供でお送りしてい
る、興野宮マコトだ。」
「おはようから、おやすみまで、くらしに夢をひろげるLIONさ
んに謝って下さい。」

変人度300%、金曜更新、感想大歓迎

序章 僕は天才です

「なあなあ、水子^{みこ}。ちよつといい？」

「なんですか？兄さん？」

「大学の新生入生への自己紹介の練習をしたいんだけど、付き合ってくれないか？」

「構いませんよ。」

「無意識に問題ある言い回しをして、新生入生に不快な思いをさせては申し訳ないから、不適切な表現があつたら遠慮なく言つてよ。」

「了解です。」

「え、僕の名前の杉下真二^{すぎした しんじ}。杉下グループの御曹司である。」

日本に本社を置く杉下グループは世界でも有数の財閥だ。『杉下がくしやみをする』と日本は、コレラ、赤痢、猩紅熱、ジフテリア、ペスト、日本脳炎になる』とまで言われる。

そんな大企業である杉下家の嫡男^{ちやくなん}の僕の責任は大きい。

幼いころから、バイオリン、習字、英会話などありとあらゆる英才教育を受け、特に勉強に関しては百年に一人の天才とまで言われるほどである。

とは言え、学問ばかりに力を入れてはいない。運動面でも球技から格闘技まで一通り経験し成果を上げている。強^しいて結果を挙げるなら、高校の頃、陸上部に所属していて何個か日本記録を出したところか。

自慢じゃないが、加えて、容姿^{ようし}端麗^{たんれい}。

「自慢ですね。今までの自己紹介のすべてが。」

「むしろ、容姿『^{たんれい}淡麗』。」

「ビールじゃないですか。兄さんのどこにグリーンラベルがあるんですか？」

「爽快^{すうかい}でキレのある肉体を持っているところ。毎日トレーニングを欠かさないこの体はまさに芸術だし。」

「多分、新入生は不快感しか感じないと思いますよ。」

「何故だ。」

「それがわからず、よく『百年に一人の天才』と言い散らかせますね。」

「事実しか言っていないのに……。」

「兄さんの辞書から『遠慮』って言葉を見つけないことができません。」

「お前だって杉下家が誇る天才じゃないか。数学界の神童なんて呼ばれてるし。」

「私は他人に気を使う性格なので。」

「おいおい、それじゃ僕が他の人に気を使わないみたいじゃないか。」

「違うのですか。」

「違う。確かに僕は成績優秀・スポーツ万能・芸術センス抜群・眉目秀丽だが、凡人に対して失礼なことはしていない。」

「……ホント自分が一番なんですね。」

「一番じゃないとダメなんです。」

「蓮舫議員にケンカ売るのはやめて下さい。兄さんが政治家になったら公共事業費が大変なことになりそうです。」

「政治家？ふん、そんなものに誰がなるか。政治家なんかになったら日本のために働かなくてはならなくなるじゃないか。」

「立派なことだと思いますが？」

「僕は世界で一番偉大な人間になるんだ。日本にとどまるつもりはない。」

「……。」

「僕は世界の覇者……いや、この世界の神になるんだ。」

「精神病院に行きましょうか。キラ様とか言われないうちに。」

1話 彼はロリコンです。

僕は朝食を食べ、東条大学とうじょうに向かう準備をする。

東条大学は日本最難関校と言われ、政界、財界の人材育成に特化した大学だ。

「今日の講義は午前中で終わるんだよな。」

僕はメイドに声をかける。

「はい。午後は日銀の鈴木氏と面会。その後官僚の佐藤氏と会食の予定です。」

「了解。僕は朝風呂を浴びて出発するから、三十分後にロールス・ロイスを玄関につけといて。」

「かしこまりました。」

次期、杉下ループ総裁の呼び声の高い俺は多忙である。朝のひと時くらいのんびり過ごしたいものである。

僕の住んでいる家は豪邸というより最早『城』もはやである。庭がとにかく広い9000坪。不動産の書き方になると、52LDKになる間取り。こんなもん東京にあつていいのか。

風呂にいたつては下手なプールよりでかい。

今日入るのは僕一人だから、節水で小さい第二浴場に行く。それでも普通の風呂の三倍ほどの大きさだ。

二十年間この家に住んでいると色々な感覚が麻痺してくる。

脱衣所に入り服を脱ぐ。洗面台の鏡を見て、一言。

「ああ、美しき僕。」

この鍛え上げられた上腕二頭筋。引き締まった大腿四等筋。そしてなにより、端正な顔立ち。イケメンという言葉は僕のためにあるのではないか。

自分の体に酔いしれ、がらり、と浴場のドアを開ける。

「おや？真二君？おはよう。」

異常事態に混乱していると、聞き覚えがある声が聞こえた。

「…………マコトさん…………」

湯気と巨大抱き枕で見えなかったが先客がいた。

彼の名は興野宮マコト。高校時代の陸上のコーチである。歳は現在三十二。

倒産寸前の会社員で部活のコーチや塾の講師を副業してなんとか生計を立てている。

一回、会社の給料支払いが滞ってマコトが餓死しそうになった時真二が助けたのが縁で友人関係となり卒業後もそれなりに付き合いがある。

「……………なんでここにいますか？」

「同人イベントの帰りにたまたま近くを通ったから、久しぶりに真二君に会いたいなーと思って。」

「なんでアンタが僕の家風呂に入ってるのか聞とるんじゃああああああ！！」

年上だが、敬語を使う余裕もなく叫ぶ。

「イベントで買った、マジカル マキナの丹生ちゃんが新品なのに少々汚れていて。不良品かと思ったが、洗えば落ちそうだったもんで、洗わせてもらっている。」

「なら、洗濯機使って下さい。」

「なっ！丹生たんを洗濯機で洗うだっ！」

丹生たん言うな。

この人はホントに三〇才か、と疑問に思ってしまう。

「真二君は本当に血が通った人間か？愛する人に…………そんなこと…………」

しかも、涙ぐんでる。

この人怖いよ。

「だいたい、愛人と風呂なんて最高のシチュエーションじゃないか。」

「相手が二次元じゃなければ僕もそう思います。」

「本当ならもう一人の俺の嫁、真愛ちゃんが乱入して3（ピー）って予想していたんだが。」

「予想じゃなくて妄想ですね。」

「入ってきたのが真二君とは……。」

心底残念そうにすんな。

「僕だつて男の裸なんて見たくないですよ。」

「そもそも、脱衣所に俺の服があつただろ？」

「自分に見惚れてて気付きませんでした。」

「ナルシスト乙。つーか、いつもそんな感じなのか？メイドさんや水子ちゃんもいるんだし、万一のことを考えて慎重になつてるかと思つてた。ま、まさか妹のラッキースケベを期待してるんじゃないだろうな？」

そんな訳あるか。

「何バカなこと考えてるんですか。」

「近親相姦……。」

おぞましいセリフを口にすんな。

硫酸を口に流し込むぞ。

「アホなこと言わないで下さい。本当に考えることがエロゲですね。」

「恐縮です。」

「褒めてないから。」

僕は深くため息をつき、服を着直し風呂場から退散した。

2話 モブキャラまで腐ってます。

数分後、

「どうしてマコトさんを家に入れた？」

僕はメイドを問い詰めた。

よく考えてみれば、マコトさんを家に招いて風呂に入れたのなら僕に一言あって、しかるべきじゃないのか。僕が風呂に入ると言うたのなら尚更^{なほさら}。

「男同士の風呂も風情があるかと。」

メイドは至極当然^{しごく当然}のように答える。

「ないよ。」

僕は全力で否定する。

このメイド、仕事は優秀だし、何より美人だ。

欠点はただ一つ。

男性同士の恋愛を見ると興奮を覚える、という点である。

「正直、真二様がナニかに目覚めてくれると良かったのですが。」

「本当に脳みそ腐ってんだな。」

男性同士の恋愛が好きな女子は婦女子をもじり腐女子と呼ばれている。

「裸を見て性衝動にかられないのですか？」

「同性じゃなければそうなるかもね。」

「男同士でも、裸と裸で一つ湯船の中にいれば妙な気を起こしそうなものですが……。」

「そんなこと言ったら銭湯は同性愛者の集まりになるだろうが。」

「違うのですか？」

「違うわ！」

「……衝撃の事実です。」

しょんぼりされた。おとーさん、なんでこんな人を雇ったんですか？

「まあまあ、真二君、そうメイドさんを責めないで。」

「黙れ、元凶。」

タオルを肩に当て、ホクホクという擬態語が付きそうなマコトさんが口を挟む。

同性の恋愛を語るメイドと一三才以下の魅力を語る友人のコンビは耐えられないので、いったん変態メイドを下がらせる。

その際、「どうぞ、ごゆっくり？」と捨てゼリフを残していた。

僕はメイドの出て行った扉に塩をまきながら、マコトさんに文句を言う。

「家に来るなら事前に連絡くださいよ。僕だって暇じゃないんですから。」

「いやあ、なにせ急に思い立ったものだから。」

「思いつきで、僕の貴重な朝の時間を潰さないでください。」

よく考えて行動しましょうって小学校の通信簿に書かれませんでした？

「うんうん。懐かしいな。」

「そんな前から言われてんなら治してください。」

「確かに欠点を治すには子供の時が一番だな。なにせ、自由な時間が多いから。でも、俺は時間は無限大にあるものだと勘違いしていた。今思えば、子供でいられる時期なんて一瞬なんだな。もっと、やるべきことをしておくべきだった……。」

マコトさんは自分の欠点を治せなかったことに後悔しているのだろうか。少しうな垂れている。

「子供の時のやるべきことは多かったのかもしれないね。」

「うん。女子のスカートをめくる、とかな。」

「それは『やるべきこと』じゃないでしょ。」

「子供の頃は何をしても許されるからな。ああ、出来ることなら、もう一度小学校に戻って更衣室を覗きたい。」
投獄とうじくされる、ロリコン。

「本当に犯罪者ですね。ありがとうございました。」

「むしろ、スク水を盗んで……はあはあ。」

「息を荒げないで下さい。」

むしろ息をするな。

この人は精神が病んでいるとしか思えない。ロリコンは病気だ。

「まあ、忙しいときにお邪魔したのは悪かった。」

「分かってくれば良いんです。」

「では、今日、暇な時間はあるかい？」

「今日はちよつと……。。。。明後日の夜なら。」

「じゃあ、その時またお邪魔するから。」

「構いませんが、何をしに来るんですか？」

「パワプロしに行きます。」

おい、コラ。

「三〇才にもなって十才以上も年下の人間と夜にTVゲームって、社会人としてどうなんですか？」

「ええ……。。。。じゃあ、水子みこちゃんも入れて桃鉄。」

「いい大人なんだからゲームから離れなさい。」

「ゲームがしたいでござる、したいでござるううう。」

ええい、鬱陶うつとうしい！

「だいたい、マコトさんは水子を見る目が少し危ないですよ。兄として、そんな人とは遊ばせません。」

「……。。。。水子ちゃんは中一だよな？」

「そうですね？」

「ストライクでございますう。」

「気持ち悪いです。」
心の底から。」

「はあ〜。」

僕は本日二度目の深いため息をついた。

なんで朝からこんな頭の悪い会話しなきゃならんのだ。

ベートーベンの交響曲第三番がかすかに聞こえてきた。

ちなみにこの曲は『英雄』と名付けられている。

世界の英雄になる予定の僕にピッタリだと思い、知り合いには僕から電話はこの着信音にしてくれ、と言っている。

マコトさんも例外ではない。むしろ、

「……エロ？……イカ!？」

と、なにやら各方面から苦情がきそうな気に入り方をしていた。

ゆえに、この曲が聞こえてくるということは……

門の方を眺めてみると、案の定マコトさんがいた。

玄関から門までそれなりに距離があり、あまりよく見えないが、とりあえず元気そうだ。

僕は安心しつつ傘を持ちマコトさんに近づく。

「おーい!」

目の前まで行くと、マコトさんは陽気に手を振っていた。

……
……
……

背中に幼女を背負って。

……
……
……

うん、現行犯だな。

僕は、防水仕様の携帯を再度取り出し110番を、

「待ってくれ。」

しようとしたら、マコトさんが門の柵の隙間から手をのばしてきて携帯を奪われた。

「事情があるんだ。」

「黙れ、歩く猥褻物^{わいせつ}。」

興野宮マコト（ロリコン）がこんな子供連れ歩いていて犯罪じゃないわけないだろ。

どこで誘拐してきた？言え、吐け、ゲロっちまえば楽になるんだよ。」

「真二の言い分は分かる。でも、この子を雨ざらしにするのは可哀そうじゃないか？とりあえず、家に入れてくれ。そこで全部話す。」なるほど、正論だ。

僕は急いで門を開け、二人を招き入れた。

4話 この物語は奇人（キジン）の提供でお送りします。

家の中に入るとメイドがタオルを持って立っていた。

「どうやら、玄関の監視カメラで一部始終を見ていたようだ。」

「その女の子は見たところ唇も青く、肌も異常に白いです。早く温めるべきかと思います。」

冷静にメイドは言う。

「僕もそれには賛成だ。」

「そうだね。急いでこの子を風呂に入れてあげて。分かっていると
思っけど、急に熱い風呂に入れちゃダメだよ。」

「かしこまりました。」

僕はメイドに話しかけたのに、なんで声が二重に聞こえるのだろ
う。

しかも、片方は男声。

「……早くその子を安全な場所に。」

僕はそう言っつて、女の子を危険物から離れさせる。

メイドは苦笑して女の子とともに浴場に向かう。

僕は、声の主に 言わずもがな、マコトさんに向かって言う。

「容疑者は自重して下さい。」

「いや、本能に従ったら、つい。」

「まさに外道ですね。」

「外道とまで言うか。俺の人生の道は定規で計ったように真っ直ぐ
なのに。どうして道を外れようか。」

どの口が言うか。

「確かに畜生道なら迷いなく進んでいますけどね。」

とりあえず、マコトさんも戯言ぬかしてないで、ずぶ濡れなんで
すから、早く風呂に入ってください。」

「幼女と?」

「いいかげん理性を働かせなさい。一人で入るに決まっています。そして、風呂から出たら事情聴取です。」

「それは構わないが・・・事情聴取って・・・。本当に犯罪者の扱いだな。」

ロリコンは存在自体が犯罪だ。

そう思いながらも、近くにいるお手伝いさんに風呂の仕度を頼む。

「メイド達は第二浴場へ行ったから、マコトさんは第三浴場・・・いや、ここからだ」と第四浴場の方が近いか・・・。」

僕の独り言にマコトさんは顔をしかめた。

「とりあえず、第四浴場の風呂を沸かして。」

お手伝いさんは頷いて、第四浴場に向かって行く。

その姿が見えなくなると、

「・・・なあ、真二君。」

「なんですか？」

「自分のセリフに違和感を覚えない？」

「どこにですか？」

僕が首をかしげるとマコトさんは怒ったように言う。

「この資本階級め。」

「あ、そうか。労働階級の家には風呂はないんですね？」

だから銭湯と言うものがあるのか、と僕は納得する。

「平民の家にも風呂はあるに決まってるんだろ。」

「じゃあ、どこがおかしいんですか？」

「しいて言うならお前の頭かな。」

ロリコンに奇人あつかいされた。

「だいたい、今、第四浴場に風呂沸かしている使用人さんだっているだろ？夜なのにこの屋敷に何人いるんだよ？」

「五十人くらいですかね？」

「貴族か。いつか革命おこして首を刎ねてやる。」

「でも、こういった予想外のお客さんが来ることもあるし、そんな

時は人が多い方が助かりますよ。」

「確かに今回はそうかもな。」

「使用人の一人はあの子の服を買いに行ってますし、それに、」

「なんだと!?!」

「え?いまのツッコむトコ?」

「当たり前だ!服を濡らしてしまった少女を助けたイベントで重要なものは何か?それは『ごめん、君に合う服がなくて。』『いいえ、これで構いませんよ。』『じゃあ、俺のYシャツを……。』
という会話の後、ブカブカの服を着た姿を見て、裾が長くスカートのように見えるエロスや余った袖をパタパタ振る萌えを堪能することにある!」

「ボケが長いです。」

つまり、裸Yシャツの少女を見たいと。

「それなのに使用人に服を買いに行かせただと!?!」

「力説しないで下さい。買に行った使用人はセンス良いから、きつとかわいい服買ってきてくれますよ。」

「ふん。金の亡者の手下など信用できるか。」

あ、拗ねてる。子供か。

「手下って……(苦笑)。僕もですけど、さっきから使用人使用人って言ってますが、今いる五十人の人たちも、だいたいはホームヘルパーの延長みたいな人が多くて、主従関係ではないですよ。」

「じゃあ、なんでメイドさんがいるんだよ?主人に仕える代名詞みたいな存在じゃないか?」

「あれは、お手伝いさんの中から、かわいい人にメイド服を着てもらっているだけです。」

父親の趣味で。」

「なん……だど?」

マコトさんは絶句した後、ぼそりと言った。

「師匠と呼ぼう。」

「やめて下さい。お父さん調子に乗るから。」

これ以上、家の中の変態度を上げないでほしい。

杉下家当主・杉下宗徳^{すぎしたむねのり}。

世界を股にかける杉下グループの会長の正体はコスプレマニアである。

本能の赴^{おもむ}くままに生きて、現在六十才になる。

5話 変態はログアウトしています

そうこうしているうちに、風呂が沸き、マコトさんは浴場に向かった。

入れ替わりに、メイドとともに血色けつしよくの戻った女の子が入ってきた。女の子は九才くらいだろうか。おずおずと部屋に入ってくる。

髪はショートカットで、くせ毛のせいかフワフワしている。マコトさんには悪いが、お手伝いさんが買ってきた白地のTシャツとよく合っている。

「こんばんは。」

僕は女の子に話しかける。

「こ………。」

「?」

女の子は口を開けて喋しゃべろうとしているが、音が出てきていない。

「こっつこっこんばんは。」

「?」

「ああ、の……な………にか書くものを………。」

女の子は言いながら、文字を書く動作をする。

「え?ああ筆談したいんだね。」

僕はメイドにメモ用紙とボールペンを持ってきてもらう。

「失礼しました。」

女の子はペンを受け取ると、さらさらと綺麗な字で文を書いていく。

「私は吃音きつおんがひどくって。うまく喋れないんです。」

見た目は小学生のようだが漢字をかなり使って筆を走らせる。

すぐ頭のいい子なのかもしれない。

「お医者さんには出来るだけ会話の練習をしなさい、と言われてい
るんですが………。どうにも上手くできなくて。筆談の方が気が
楽です。」

「筆談で構わないよ。」

とりあえず、名前を覚えてくれる？僕は杉下真二。」

『私は、織部零と言います。』

「うん、よろしく。」

『よろしくお願いします。』

「さて、何から聞こうかな……。とりあえず、マコトさんどんな関係なの？」

もし、ここで何らかの犯罪臭がしたら、マコトさんは僕の手で処分しよう。

とは言え、僕だって本当にマコトさんが犯罪を犯したとは考えていない。

あの人は常識だけで人非人ではない。

他人を傷つけることを嫌ういい人なのだ。

『私が近所のコンビニに行こうとしたら、「はあ、はあ、そ、その君……。僕と一緒に楽しいことしない？」』

粗大ごみの日はいつだったけかな？いや、マコトさんは生ごみになるのかな？あはは。

栗ちゃんは文字でいっぱいになったメモ用紙をはがし、さらに続ける。

『って、知らない人に声をかけられて、連れて行かれそうな時にマコトさんが助けてくれて……。』

……。ほづ？

『車に押し込められそうになってたんですけど、マコトさんが石を投げつけて隙をつくってくれたんです。それで、犯人の手から離れた私を背負ってここまで運んでくれたんです。』

なんだ。いい話じゃないか。でも、

「石を投げつける？マコトさんが？相手、死んでなきゃいいけど。」
前にも言ったようにマコトさんは陸上のコーチをしている。

陸上には『走る』だけでなく、走り幅跳びや棒高跳びなどの『飛ぶ』分野と、ハンマー投げや槍投げなどの『投げる』分野がある。

マコトさんのすごいトコロは、それらどの分野でもこなせることだ。

砲丸投げもその中に入っている。

そんな人の投げた石ははつきり言って凶器だ。

『手加減した、って言ってました。』

「ならいいけど。」

『私を背負ってる時に、「世の中のロリコンは全部がこんなんじゃないんだ。」から始まって「つまり、紳士^{ロリコン}は幼女を見守る騎士^{ナイト}なんだ。」で終わる「ロリコンのあり方を」演説してくれて……』

』

「子供になんて話を聞かせるんだ。」

『「ロリコン」っていい人達なんですね。誤解してました。』

「それは違うから。」

僕はこの後、栗ちゃんに「性格」と「性癖」の違いと、危険なものには近づかない事の大切さをマコトさんが風呂から出てくるまで語り続けた。

6話 この業界では紳士と書いて変態と読みます

「話は雫ちゃんから聞きました。いいことしたじゃないですか。」
風呂からあがったマコトさんに話しかける。

「ナイトとして当然のこと。」
どや顔された。

「世の中、見て見ぬフリをする人も多い中、立派ですよ。」
「照れるぜ。」

マコトさんが調子に乗った。

が、急に真面目な顔になって、

「でも、最近は『規制』『規制』って息苦しい世の中になってきてるよな。あんまり締めすぎると逆に暴走する人が出てくるんじゃないかな。」

「そのうちの一人があのだと誘拐犯だと言いたいんですか？」

「そう。」

「……………飛躍しすぎな気がするが。」

でも、日本人は規則より道德を大切にしてきた。規制や規則が増えていっているのは道德が少なくなってきたからだと言えるかもしれない。

道德の減少と犯罪の増加は無関係ではない。

「よし！」

マコトさんがいきなりおおきな声を出した。

「政治家になろう。」

どうしてそうなった。

そんな京都に行くみたいになれるわけない。

「このたび、出馬する興野宮マコトでございます。」
選挙演説？

「少子化対策に力をいれます。」

「うん。立派なこと言ってるんですけどね……………」

子供を増やそうって欲望が見えるよ。

「嫌いな言葉は『成長』です。」

「普通は好きな言葉ですよね？」

変態の変態による変態のための政治。

それを人は、世の末と呼ぶ。

「失礼します。」

そんなアホな会話をしていると、メイドが鞆かばんを持って入ってきた。

「真二さん、少しいいですか？」

「なに？」

「その子が背負ってたリュックです。だいぶ濡れてしまっていたので、勝手ながら中身を出して乾かそうとしたんですが……。」
メイドが口ごもる。

「？」

「あの、こんなものが出てきまして……。」
メイドはカードのようなモノを取り出す。

「こ、これは!？」

俺は、思わず栗ちゃんを見る。

栗ちゃんは僕たちの会話を遠目に眺めながら、出されたホットミルクに口を付けていた。

「？」

僕の視線に気づくと、なにがあったの?と言つように首をかしげた。

「そ、そんなばかな!」

「ど、どうしたんだい?真二君?」

僕の声に驚いて、マコトさんが覗のぞき込んでくる。

僕は手に持っていたカードを見せる。

「!?!」

すると、マコトさんの顎あごがカクンと落ちた。
そこに書かれていた文字は・・・・・・・・

運転免許証

氏名欄には織部おしろと書かれていた。

7話 この変態を止められますか？

「考えてみれば、可能性は一つしかないよな。」

免許証を一通り眺めたマコトさんが言う。

「そうですか？」

視線を落とすと、免許証の写真欄には、あどけない笑顔で雫ちゃんが写っていた。

雫ちゃん「免許証に写ってる雫ちゃん」十八才以上、ってコトなんだけど……。

雫ちゃん 十八才以上となってしまう。

免許証の誕生日を逆算すると、雫ちゃんは今年で八タチ。

身長一三〇センチの成人なんているか？

「僕には有力な仮説が立てられません。」

「ふっふっふ。まだまだだね、ワトソン君。」

マコトさんが上から視線で言い放つ。

「雫ちゃんは、黒ずくめの男に謎の薬を飲まされて、体が縮んでしまったんだよ。」

「サンデーで連載されてるような話ですね。」

その名は、名探偵・コナン。

「トリックはすべて解けた。真実はいつも一つ。」

「マコトさんの脳細胞が一つなんじゃないんですか？」

この人真面目に考える気ないな。

と言うか、本人がいるんだから、まず直接聞くべきだった。

ノートリンに聞いたのは間違いだった。

僕はホットミルクを飲み終えた雫ちゃんの方に歩いていく。

「ちよつと、いいかな？」

膝をつき、雫ちゃんの視線に合わせる。

椅子に座っているせい、余計小さく感じる。

『なんでしょうか？』

雫ちゃんはメモ用紙につらつらと文字を書いていく。
まず、核心から聞こう。

「君、いくつ。」

『二十才。』

.....

.....

「怪しい取引を覗いて、後ろから殴られて、」

『APT X 4 8 6 9 は飲まされてません。』

コナンが飲まされた薬をなんで正確に言えるのだろうか？

僕は受け入れがたい真実を目の当たりにしていた。

と、言うか少し混乱している。

恥ずかしながら、マコトさんと同じ質問をしてしまった。

目を丸くする僕に雫ちゃんはメモ用紙を差し出す。

『いつか成長期がくると思ってたんですが。』

「いや、成人になって成長はしないよ。」

世の中には不思議なことがあるもんだ。

あービックリした。

「.....」

「あれ？マコトさん？どうしたんですか？」

「.....雫ちゃんが二〇才.....」

マコトさんは小刻みに震えている。

シヨックを受けてるのか？

常々、「好みのタイプは一三才以下です。」って言うてる人だからな。

「.....もし俺が小学生と付き合ったら、犯罪だ。でも二十才なら無問題。大手を振って幼女とあんなことやこんなことを.....」

「.....」

すると、マコトさんはいきなり立ち上がって叫ぶ。

「合法ロリ、キタアアアアアアアアアア。お前が違法だ。」

前言撤回。この人はショックを受けているのではなく、歓喜に震えているだけだ。

マコトさんは栗ちゃんのもとに走っていき、片足を付く。

それはさながら王にかしずく臣下のようだ。

「栗ちゃ……いいえ……栗さん。」

「はい？」

「結婚してください。」

「ごめんなさい。ちょっとこの人頭がイっちゃってるんです。」

ドスン

僕は妄言まうげんを垂れ流すマコトさんの鳩尾みぞおちにパンチを決め気絶させる。

「本当にすいません。このボンクラは分別がなくて……。」

「いえいえ。マコトさんは楽しい人ですよ。」

栗ちゃんは、そう書かれた紙を見せながら微笑んだ。

この度量どじょうりゆうは、成人女性の懐深ふとこぶさなのだろうか。

8話 彼女は見かけは子供、態度は大人です。

「ところで、雫さんは大学生？」

僕は飲み物の替えをメイドに頼んでから、尋ねる。

呼び方も雫ちゃんから雫さんに改める。

「はい。京知大学きょうちの一年生です。一浪してます。」

「ああ、ハタチって聞いて同級生だと思ったけど、後輩なんだ。」

「では、真二さんも二〇才なのですか？」

「うん。東条大学とうじょうの二年生。」

「東大の現役生ですか。すごいですね。」

「天才ですから。」

「本当ですね。」

僕の自己陶醉じことうずいにも笑顔で答える。

うーん。大人の対応。見かけは小学生なのに。

「そう言えば、京知大って京都の大学ですよね？どうして東京に？」

「事情を話すには少し長くなるんですが……構いませんか？」

僕が頷くと腕まくりをして文字を書きだす。

「最近、京都で失踪事件しっそうが相次いでいるのはご存知ですか？」

「ああ、ニュースでやってたね。今、六人くらい行方不明になっ

てるんだよね？」

「神隠し事件なんて呼ばれてます。」

実は、その失踪者の一人が私の友人の妹なのです……

……
……
……

雫さんは静岡の田舎町の出身だそうだ。

言語障害を持ちながらも、田舎の特性の”困ったときはお互い様”の精神で周りに守られていた。そのサポートのおかげで、自分が

障がい者であると感じる機会は他の障がい者に比べて少なかったらしい。

田舎に限らず、現在では“障害者支援”も“特別支援”と名前を変え、数十年前と比べると障がいを持った人が生きやすい世の中になってきている。

しかし、雫さんが大学生になり、田舎から離れると状況が変わった。

僕が話を聞く限りでは出会いが悪かった。渡る世間に鬼はないと言うが、稀に鬼がいる。それに雫さんは入学早々目を付けられてしまった。

人間は自分とは違うものを遠ざける傾向がある。雫さんを目の敵にした女性はそれが極端だった。確かに、友達と自分の共通点を見つけたら嬉しくなるし、逆だと自然に相違点の話題を避ける。彼女は他人との同和をなにより大切にしていた。協調性を大拙にする彼女には人が集まった。しかし、障害はもちろん、自分ではどうしようもない、人と違う部分を持つてる人はたくさんいる。彼女はそれが分からなかったのか、分かっている、異端分子に“見せしめ”をしたのかは不明だが、雫さんは集団で嫌がらせを受けた。

僕としては大学生にもなつて下らないと言つ他ないが、実際にあったのだから仕方がない。

イジメの内容はドラマのように酷い内容のものではなかったが、今まで経験したことのない重圧に雫さんは潰れかかった。

それを救ったのは同じ学部の「変人」と呼ばれる男であった。彼は重度のシスコンであり、携帯の待ち受けに小学生の妹の写真を張り付け、「俺の妹はこんなに可愛い」と周囲にアピールしていた。僕からすれば病気の域である。

そんな彼の周りに集まるのは同類か心の広い人間くらいだ。その輪に入り、守られることで、入学してからの数週間をなんとか乗り越えてくれたそうだ。

神隠し事件で誘拐された女の子はそんな彼の妹であった。

.....

妹がいなくなってから、彼は塞ぎつぱふさなしなのです。

私、何か力になりたいくて.....。

私に出来るコトは聞き込みくらいでしたが、できることをやって
いたんです。

でも、なかなか事件は進展しなくて.....。

新しい手がかりがないかと思つていたら、別の失踪者の一人が東
京で目撃されたつてニュースで聞いて.....。

それで、何か掴めればと思つて、東京に来たんです。』

「それはまた.....」

行動力があるなあ。

「うん。」

その時、近くのソファで気絶していたマコトさんがむくりと起
き上った。

シリアスな話をしてるんだからギャグ要因は黙つてて欲しいんだ
が.....。

僕のそんな意思は通じるはずもなく、マコトさんは目を開ける。

「天上天下 唯我独尊。」

「なんでいきなり、釈迦しやかの誕生した時の言葉を発はするんですか？」

「いや、ちよつと前から起きてたんでけどな.....。こつ.....個性あふれる起き方を考えたら結局こつなつた。」

どうして、そうなつた。

「いつから起きてたんですか？」

「『栗さんは大学生？』から。」

最初からじゃん。

「空気を読んでもうしばらく寝てください。」

「シリアス クラッシュャーの異名を持つ俺にそんな難題を押し付けるな。」

「そんな通り名、聞いたことないですが？」

「それに、さつきから話してる神隠し事件、俺、結構詳しいんだ。」

「そうなんですか？」

「うん。消えている子が全員、小学生以下の女子だから。」

「犯人はお前だ！」

「いや、コナンネタはもういいから。」

マコトさんはお腹かいつぱいと言いたげに手を振る。

「まあ、行方不明者なんて年間何人も出てるわけだから、そう言った猟奇的な共通点がないと事件になりにくいですよね。」

「しかも、この一カ月で立て続けだからな。ニュースで騒がれない訳がない。」

『地元の人は崇りだとか騒いでます。』

凜さんは暗い顔をしながらメモ用紙を見せる。

「確かにそうなるかもな。」

マコトさんは至極当然のように答える。

神隠しだの祟りだの、超常現象扱いだ。

「マコトさんも人ならざるモノの力だと思えますか？」

「いいや、思わない。世の中にはまだまだまだ科学で解き明かせない謎があるが、この事件はそういった類じゃない。」

「なんで言い切れるんです？」

「どうも同業者の匂いがする。」

真面目な顔して何を言い出す。

でも、マコトさん、カンはずごく良いからなあ……。

「俺は幼女の笑顔をひたすらに求める探究者だが、この犯人は違うらしい。」

ロリコンの種類を語られても困る。

「幼女が安心してくらせるようにするためにも、真二君も協力して。」

「マコトさんを駆除すれば、町に平穩が訪れる気がしますが。」

「そんなこと言わずにお願い。警察関係者にも顔がきくんだろ？」

「そりゃ、僕の交友関係は広いですから、友達の友達までで世界の大体の職業は網羅できますけどね。」

「友達の友達はアルカイダ。」

流石にそれはない。

「なあ、頼むよ。ニュースに出ている以外の情報も知りたいんだよ。」

「なんか必死ですね。知ってどうするんですか？だだのオヤジにできることはないですよ。」

「自分出来るコトをしたい。隼さんのために。」
なるほど。

要は、幼女の笑顔を求めるマコトさんとしては、隼さんが困っているのを見過ごせないと。

僕はふと隼さんの座っている方に目をやる。

隼さんは何とも言えない円らかな瞳で僕たちを見つめていた。
守ってあげたくなるオーラ満点だ。

ロリコンに目覚めたわけではないが……。

「分かりました。出来る限りのことはします。」

たまには人助けを試してみるか。

「いいんですか!？」

隼さんは驚きながら文字を書く。

「乗りかかった船だから。」

僕はそう答えて携帯を取り出す。

電話相手は警視庁の参事官だ。

9話 僕は語ります

数十分後

「知り合いの警視正の同期が京都府警の部長だったもんで、割と色々情報が手に入りました。」

「おお、さすが。」

マコトさんが拍手をしながら言う。

「やっぱ、階級組織は出来るだけ上とコネを結んどくといいですね。」

多少の無理がきくから。

捜査情報の流失は公務員法違反だから、キチンと揉み消せるだけの地位にいる人に頼まなければならぬ。

「真二君、怖いこと考えてない？ 後ろに手が回ることしてないよね？」

「してるに決まってるじゃないですか。」

「決まってるんだ。」

「多少なりとも危ない橋を渡らないと目に見える成果はありませんよ。No Pain, No Gain.」

「念のため聞くけど、大丈夫なんだよね？ 色々。」

「はい。ちゃんと信用できる人を選んでますから。」

今、十時ですよ。こんな時間まで仕事をやっていて、電話に出てくれる真面目な人に聞いてます。」

「いや、真面目な人は情報流失しないだろ。」

「真面目と堅物かたぶつは違うんですよ。」

ルールに縛られている人間はなかなか出世しない。

規則の裏をかき世の中を上手く渡り歩ける人間が人の上に立つ。

「本当に信用できない人間は金や地位のために情報流失する人です。」

そう言った不正は遅かれ早かれバレる。

僕は、警視庁と警察庁を取り持ったりなどの仲介役としてギブアンド・テイクを果たしている。

不正は不正だが、仕事をスムーズにする不正。

このような実のある不正は誰かに知られても見逃される場合が多い。

明るみにしても誰も得しないからな。

「どうにも俺には入りこめない世界だ。」

マコトさんはそう言って肩をすくめる。

「しかし、その人はこんな時間まで働いているのか。俺は普段この時間ならネット上で狩りをしてるのに……。」

モンハンね。

「ただ、給料はマコトさんの三倍は貰っていますよ。」

「なに。う、うらやましい。」

万年金欠で職業掛け持ちしているマコトさんは、心の底から本音を漏らす。

「十五時間労働、休日なし、人の五倍勉強しないと入れない職場ですが。」

「……公務員って大変だな。」

「基本、サービス残業ですからね。」

「世の中、楽な仕事なんてないもんだ。」

「……そうですね。」

官僚の中には不正しまくり、献金もらいたい放題のヤツもいて、一概にそうとも言えないんだが……。

まあ、そう言う人間にも使い道はあるからな。フフフツ。

「真二君、顔が怖いから……。」

おっと、しまった。

ポーカーフェイス、ポーカーフェイス。

「それじゃ、本題に入りますが……。」

「うん。真二君のキャラが真っ黒にならないうちにな。」

「では、まだニュースになっていない情報なのですが……。」

僕はメモを取り出し話す。

「今日、小学生の失踪が二件発生してます。」

「??? と、言うことは?」

「神隠し事件が東京進出してる可能性があります。」

「マジで!?!」

「はい。そこで、マコトさんが有力な手掛かりになることが期待されます。」

「俺が?なんで?」

「小学生にしか見えない雫さんが誘拐されそうになったんですよ?」

「あ、あの石ぶつけたヤツが神隠し事件の犯人か!」

「その確率は低くないでしょう。」

それで、雫さんにも聞きたいのですが、誘拐犯の風体ふうていを覚えていますか?」

僕たちの会話を黙って聞いていた雫さんはペンを走らせる。

『身長は一七〇センチくらいの小太りの男です。黒いテーラードジャケットを着てました。声は普通の人より高めだったと思います。』

「なるほど。では、マコトさんは・・・って、あれ?」

今さっきまで僕の隣にいたマコトさんがいない。

さっきまでそこにいたのに。

後ろを振り返ると応接室のドアが開いていた。

.....

マコトさんが暴走した。

まったく、あの人は地道に調べるってことができんのか。

僕は深く、深く溜ため息をついた。

10話 この変態にピンときたら連絡をお願いします。

マコトさんはどこに行ったのだろうか？
僕は思案する。

マコトさんは脳筋と言うか、考えるより行動してみる、行き当たりばったりの性格だ。

しかし、「どんな行動をすればよいか。」が分からないと動けない人間でもある。

だから、マコトさんがいなくなったってコトは、動くだけの理由があったと考えるのが自然だろう。

その理由は……例えば……犯人に心当たりがある……とか？

いづれにしても、犯人と接触しているマコトさんが一人では危険だ。

早く、行き先を特定して保護しないといけない。

僕は急いでロールス・ロイスを玄関に着けさせる。

そして、搜索に向かおうとし、振り返って言う。

「栗さんはここで待ってて。」

『いえ、私もマコトさんが心配です。連れてって下さい。』

「それは……」

やめた方がいい。人が多いこの屋敷の中に残っていた方が安全だ。

そう言いたかったが、論議している暇はない。

マコトさんの足は速い。

中距離が専門だが、フルマラソンも三時間強で走る実力者だ。

「分かった。でも、僕から離れないようにね。」

栗さんは頷いて僕についてくる。

まったく。

マコトさん、女の子の笑顔が好きとか言っときながら、雫さんをこんな不安な顔にさせるんじゃないか。

一時間後。

僕たちは雫さんが誘拐されそうになった場所に来ていた。車どおりは多いが、人通りは少ない薄暗い場所だ。雫さんに案内されなければこの場所には来れなかった訳だから、連れてきて正解だったのかもしれない。

マコトさんは……ここにもいないな。

僕は落胆らくたんしつつも、聞き込みを開始する。

数十メートル先のコンビニに入り、店員に質問する。

「すみません、変態見ませんでしたか？」

『真二さん、その聞き方はどうかと。もう少し具体的に。』

じゃあ、マコトさんは、走って出てつたみたいだから、

「はあはあ言ってるロリコンを見ませんでしたか？」

『見たたら、多分警察呼んでますよ。』

雫さんのツッコミどおり、店員からは有力な情報を得られなかった。

さらに、一時間後。

雨もやみ星が微かすかに見えていた。

僕は一旦いったん、屋敷に戻ることにした。考えうる場所はすべて捜索そうさくしたから。

僕は雫さんと一緒に車を降り、屋敷に入り、応接室に向かう。

すると、応接室の扉の向こうから妙な声が聞こえてきた。

「ねえ、私たち、もうダメなんだよ。」

聞こえてきたのは幼い女の子の声。

「私とあなたじゃ何もかも違う。地位も、いるべき場所も、年齢も、すべてが。」

女の子は泣き出しそうな声で続ける。

「分かってる。あなたの言いたいことは……。」
声はしだいに小さくなっていく。

「でも……でも……ごめんなさい……。」
しばしの沈黙の後、

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん」

マコトさんの泣き声が響いた。

僕が扉を開けると、そこには泣き崩れるマコトさんの姿があった。

「なんで……なんで………BAD ENDなんだああああ
あああ！」

マコトさんはパソコンを抱え込み涙を流し、叫んでいる。

「ギャルゲーで泣き喚わめかいで下さい。」

パソコンの画面には「恋愛シミュレーション・私をつなぎ止めて
旦那様？」と表示されている。

さて、どこからツッコミを入れようかな？

僕が二回目の溜め息をつくと同時に、日付がかわる合図を柱時計
が鳴らした。

11話 世にも残念な物語……です

「とりあえず、どこに行っていたんですか？」

僕はゲームを片づけさせながら尋ねる。

「もちろん、ギャルゲーを買いに。」

もちろんの使い方間違っている。

「そんな戯言、信じてでも思ってるんですか？」

こんな時間にゲームショップがやってるか。

「マコトさんが重要な情報を持っていることは状況を鑑みれば分かります。」

僕だって、危ない橋を渡ってるんです。教えてくれても良いじゃないですか。」

『私からもお願いします。いったい何をご存じなのですか？』

「……………」

しばらく、マコトさんは黙っていたが、僕と雫さんの視線に耐えかねたか、ゆっくりと口を開く。

「身内の恥だから、黙っていたかったんだけど……………」

マコトさんは苦虫を噛み潰したような顔をして言う。

「雫ちゃんを誘拐した犯人、どこかで見たことのある顔だったんだ。」

「いつ、どこで、ですか？」

僕は身を乗り出して尋ねる。

「俺が、小学生に性的興奮を感じる要因について講演をした時。」

「…………その講演、人が集まったのですか？」

「千人ほど」

「驚くべき犯罪集団。」

「その時、俺の話に感動して『弟子入りさせてください！』と頼み込んでくる人が何人かいてね。」

「狂信者！？もはや、宗教団体ですね。」

「その内の一人が彼。」

「名前は？」

「それが思い出せなくてね。家に名簿があったもんで取りに帰って
いてんだ。」

「そうだったのか。」

「マコトさんは犯人を追っている、とっていたので、自宅は盲点
だった。」

「マコトさんは数枚の紙を取り出す。」

「これが『未成熟な女兒を見守る会』の名簿。」

「ヤバい、名前から犯罪臭がする。」

「多いですね。見守る会。」

「僕は目を通しながら言う。」

「総勢七十五名。」

「犯罪組織のレベルですね。」

「日本の将来が危ぶまれる。」

「それで、例の男は？」

「これ。」

「マコトさんが指をさしながら言う。」

「名前は久我静左衛門。」

「長え。江戸時代の名前みたい。」

「偽名じゃないですか？」

「その可能性もあるけど、俺が注目してるのはここなんだ。」

「そう言っって手を右に動かす。」

「！？京都府在住って書いてありますね。」

「京都は今、神隠し事件のHOTな場所。」

「流行みみたいな表現を使わないで下さい。でも、確かに、偶然とは
思えません。」

「だから、俺は京都に行こうと思う。」

「マコトさんはいつになく真剣な表情で言う。」

「ちょ、ちょっと待って下さい。」

それは性急すぎる。

犯人と顔見知りの人間はあまり動き回らない方が良いに決まっている。

この辺で警察に任せ^{まか}るべきではないのか。

そう思っ^て、僕は京都市行きを反対しようと口を開く。

「あの……」

「そこで、真二君に頼みがある。」

しかし、僕の声をマコトさんが打ち消す。

マコトさんは反対意見など出させないというような強い瞳^{ひとみ}で言葉を続ける。

「金、貸して。」

「十日で一割の利子でなら良いですよ。」

闇金か、と言うマコトさんの叫びを無視しながら僕は提案する。「今日はもう遅いですし寝ましょうか。色々あって、雫さんも疲れただろうし。今後の方針は明日の……と言うか今日ですが……朝までに責任もって決めときますから。どんな道を進むにしても勇み足は厳禁ですよ。」

マコトさんも雫さんもとりあえず賛成してくれた。

僕は二人を寝室に案内して、軽くシャワーを浴びて床^{とこ}に就く。

こうして僕の長い一日は終了した。

間章 僕の出番は少なくなります。

翌朝。というか、まだ日が昇っていない時間だが、杉下家の朝は早い。

「おはよう。水子^{みい}」

「おはようございます。兄さん。」

^{ちやくなん}嫡男であり多忙な僕は、睡眠時間はいつも三時間ほどだ。

水子も僕と同じ時間に起きているが、こいつは単純に寝るのが早
いだけだ。

七時には寝る準備を開始している。

婆さんみたいだ。

「兄さん？」

なんか妹が怒ってる！？地の文読まれた？

「え〜と・・・当然だけど、マコトさん達はまだ寝ているみ
たいだね。」

僕は慌^{あわ}てて話題を変える。

「そういえば、昨日遅くまで、ドタバタしてましたけど、何かあっ
たんですか？」

「いや、実はね・・・。」

僕は水子に昨日のあらましを説明する。

・・・

「そんなことがあったんですか。」

「うん。どうしたもんかね。」

マコトさんは京都に行きたがるだろう。

雫さんも大学の授業を休んで東京に来ているのだろうから、京都

に帰るのは必然。

誘拐犯の目撃者である二人が、神隠し事件の起こっている場所に行くことはマズイとしか言いようがない。

せめて、優秀な護衛が必要だ。

「誰か、ボディガードを引き受けてくれる人はいないかな？」

「民間の警備会社ではダメなのですか？」

「一府一都をまたにかける犯罪だ。単独犯とは考えにくい。警備会社には犯人の仲間がいる可能性だってある。」

柔道二段、空手三段の僕が付いて行ければ良いのだけど……。
生憎、この一週間は会合などで一日の休みもない。

マコトさんは逃げ足は速いから、一人きりなら心配は少ないが、
隼さんと行動となると力不足だと思う。

「信頼のできる精鋭が欲しいな。」

「京都でしたら、院照さんに頼めば良いのでは？」

「あの人かあ……。」
京都天王山の麓にある珠円寺の坊主・院照。歳は十八。

坊主である一方、学問にも優れ、特に数学に関しては非凡な才能
を發揮し、数学界の神童と呼ばれる水子と親交がある。

加えて、室町時代の僧兵の名残か杖術に長けた人物でもある。

知り合いで、武術に優れる人物。

まさに、今回の護衛の適任者かと思われる。

……だけだなあ……

マコトさんみたいに、存在自体が規制されそうな人間ではないが、
一癖も二癖もある人物である。

「素直に引き受けてくれるとは思えんなあ。」

「私が付いて行きますよ。」

「確かに、あの人は水子には甘いけど……。家族を危険な目に遭
わせるのはなあ……。第一、学校があるだろう？」

「義務教育を一日や二日休んだところで問題ありません。」

教師が聞いたら卒倒しそうなことをさらりと说ってのける。

「そうは言ってもなあ……。」

「それに、私にも思ふところがあつて京都に行こうとしてるんです。」

「

うん。」

こうなつた水子は頑固だからな。

父・杉下宗徳すぎしたむねのりは多忙なため、水子の行動の責任は僕に移譲いじやうされて
いる。

しょうがない。妹の好きにさせるか。

兄は東京で出来ることをしよう。

1ツ目 キタアアアアア！俺の時代。世はまさにロリコン時代。幼女を求め探

〜ここからの主な登場人物〜

おまのみや
興野宮マロト…変態

すきした みこ
杉下水子…真二の妹で数学の天才。中学二年生。

おりへしすく
織部栗…身長百三十三センチの二十才。

いんてる
院照…京都の坊主で水子の友人。インテル入ってる十八才。

1ツ目 キタアアアアア！俺の時代。世はまさにロリコン時代。幼女を求め探

「マコト様。朝食の用意が出来ました。」

声をかけられ、俺は半分ほど覚醒かくせいした。

寝起きの悪い俺は寝ぼけた頭で考える。

なんでメイドさんに起こされるんだ？

「だいたい、メイドの起こし方と言えば（ピ
）に決ま
っているだろう。」

俺は十八才未満には聞かせられない、セリフを発した。

「朝から表現しようのないセクハラですね。」

薄目で見えるメイドさんの視線は冷たい。

ここでようやく真二君の家に泊ったという事実を思い出す。

「まったくもう……」

メイドさんが腰に手を当てて言う。

その行為が、なんか絵になるなあ。

俺の愚息ぐくぐくが元気になってしまう。

「マコト様、早く起きないと……」

メイドさんが近寄ってくる。

確か昨日のゲームだと、朝、主人を起こしに来たメイドはこう聞
いてきた。

『早く起きないと、キスしますよ？』

うおおおお。いいな。現実でもお願いします。

いつせーのーで。

「早く起きないと、キルしますよ？」

「はい起きましたよー。新しい朝が来た。希望の朝だ。」

殺（killer）されそうになった。

「では、着替えたら食堂に来てください。」

先ほどまでの殺気を消してメイドさんは俺の服を横に置いた。

昨日濡らしてしまった服を乾かしてくれたのか。ありがたい。
俺はいそいそと着替え始めた。

食堂に行くと、雫さんと水子ちゃんがいた。

「おはよ。二人とも。」

「今日も可愛いね。俺は二人を同時に愛せる自信があるんだ。ハレムルートで人生を俺たちと歩まないかい？」

「ロリな二人の美しさに、朝から思わずプロポーズしてしまった。」

「真二さんがいなくても、マコトさんの暴走は止まるのですか？」

「雫さんが苦笑いしながら、そう書かれたホワイトボードを見せる。筆談がエゴになってる。」

「見せられた水子ちゃんはいつもとより少し赤い顔をしていた。」

「熱でもあるのかな？」

「そんなことを考えながら顔を見つめていると、水子ちゃんは決意したように言う。」

「私が兄の代わりにツッコミを頑張ります。」

「むしろツッコませて下さい。性的な意味で。」

「わーん、セクハラされたー！」

「中学生を泣かせてしまった。」

「少しセクハラしすぎたか？」

「自重じゆうじゆうするから許して。」

「一応、反省。それでも三〇代。」

「よし、それじゃあ、話題を変えようかな。俺が暴走しにくい話ネタに。」

「ところで、真二君は？」

「もう、大学に行きました。」

「早いな。」

「夜は会食とかで忙しいから、朝のうちに研究進めとかないと、単位が出ないとか言っていました。」

俺はあまりにテンションが上がり奇奇怪怪な行動をしてしまった。
しまった。正気を保たねば。

「それじゃ、会社に有給申請してきます。」
とりあえず俺は、水子ちゃんと雲さんとの旅行の準備に向かった。

2ツ目 俺実はツインテール萌えなんだ。いや、ロングも捨てがたいが基本に自

俺が有給休暇の申請をすると、あっさり受理された。

・・・このところ仕事なかったもんな。

俺の勤めている会社は大企業の下請けで成り立っている。最近

不況のせいかな、仕事がこず、人手が余っている。

・・・リストラとか嫌だな。

とは言え、これでロリ少女と京都デー・・・じゃなくて、調査で
きる。

なんとかこの2、3日で解決の糸口を掴みたいな。

そんなことを考えながら東京駅の中央地下通路を歩いていた。

時刻は現在、12時半。

駅弁を買って車内で食べようかなと思い、改札を通り、新幹線の
ホームに出る。

すると、待ち合わせをしていた水子ちゃんと雫さんを発見した。
俺はキオスクに立ち寄ろうとしていたことも忘れ、二人の姿に見
惚れる。

水子ちゃんは黒を主としたレイヤードと、デニムブラウンのショ
ートパンツが似合っている。生足が出ていることに俺は興奮を覚え
る。ロールアップになっているのも魅力だ。

一方、雫さんはチェックのワンピース。童顔の雫さんにワンピ
スが映える。だが、赤と黒のチェックのため、どことなく落ち着い
た印象も受ける。まさしく、二〇代ロリの魅惑を引き出していると
言える。おっと、ヨダレが出てきた。

・・・
・・・
・・・

「あれマコトさんじゃないですか？」

『どれですか？』

「ほら、私たちを双眼鏡で覗いてる……。」

「分かった。ローアングルで私たちにだんだん近づいている人ですね……。」

「間違っことなき不審者ですね」

『あ、駅員さんに捕まりました。』

「助けます？」

『少し頭を冷やさせるべきかも……。』

……

……

……

「あやうく、警察のお世話になるところだった。」

俺は駅員室から水子ちゃんと雫さんに連れられて出る。

「まったく。洒落にならない事態になりますよ。」

「大丈夫。送検されたことはないから。」

「逮捕されたことはあるんですね。」

「五回ほど。」

「多いですね。」

「週五回ほど。」

「とても多いですね……。」

水子ちゃんは呆れたように言う。

「とりあえず、早く新幹線に乗ろう。指定席だから、乗り遅れないようにしないとな。」

「マコトさんが捕まらなければ、もう乗車してたんですけどね。」

水子ちゃんがそんな愚痴を言うと同時にアナウンスが流れる。

「13:00発、のぞみ351号、新大阪行きが、18番ホームに到着します。危ないです……。」

これは、俺たちが乗る予定の新幹線だ。

「走るぞ。」

「はい。」
「隼さんも頷く。」

俺たちはホームへ続くエスカレーターをダッシュした。

走った甲斐あつて、出発時間に間に合った。

俺は陸上をやっていたおかげで、息を乱していないが、隼さん達はハアハアと息を荒げている。その姿を見て俺は息を荒げる。ハアハア。

呼吸を整えながら、指定席の車両まで行く。

そして、俺は三人席真ん中に座る。左に水子ちゃん、右に隼さんという席順だ。

ハーレムだぜ。わはっはっは。笑いが止まらない。

「あ、駅弁買い忘れた。」

列車が発車して数分後に俺は気づく。

結構、腹減っているのに、京都までつらいなあ。

『車内販売があると思いますが……。買ってきますよ。』
そうホワイトボードに書き残して隼さんは席を立つ。

そして、隼さんは幕の内弁当を三つ持って帰ってきた。

どうやら、水子ちゃん達も昼食を食べていなかったようで、一緒にランチとなった。

「あーん。」

「しませんよ。」

『右に同じく。』

食べさせようとしたら、拒否された。

残念だ。

3 ヅ目 人間だろうが未確認生物だろうが、そこにつるべたおっ〇いがあるのな

三時半に京都駅に着いた俺は、目の前にそびえる京都タワーに上りたいと駄々をこねるが、却下される。

「馬鹿と煙は高いところが好きなんですよ。」
と言う水子ちゃんのツツコミが敵しかった…。

しゅしゅ、在来線に乗り、山崎までたどり着く。

「ここから、三〇分くらい歩けば、珠円寺しゅえんですよ。」

一般的な観光地とは少し離れているせいか、民家も多いが、京都風情がある。

なにより、緑が多い。

『私、この辺りは来たことなかったです。』

雫さんが辺りをキョロキョロ眺めながら、そう書かれた文字を見せる。

「そっか。京大は京都御所の方ですからね。」

『ですから、このあたりの地理はよく分かりません。』

「私たちの進行方向とは逆ですが、近くには桂川が流れています。」

少し下流に進むと、宇治川と木津川と合流して淀川になります。」

『では、私たちの向かっているのはあの山の山頂の方向ですか？』

そう書かれたホワイトボードを見せながら、天王山を指す。

「いや、そこから少し北です。でも坂を上らなければならぬこと
に変わりはありませんが……。」

『早く坂が終わって欲しいです。』

「ああ。疲れますもんね。」

『ええ。それに……マコトさんが、私の数歩後ろを歩いて、坂を
利用してスカートのそを覗こうとしてくるんです。』

「小学生か！」

水子ちゃんは叫びながら俺の方を振り返る。

スカート覗きがばれた俺は言った。

「照れるぜ。」

「恥じてください。」

京都の風景を眺めながら、俺たちはしばらく歩いてみると、木々に覆われた場所にポツンと建っている寺を見つけた。

3メートルほどの門が大木で作られており、風格があった。

そこには珠円寺と書かれた看板が掲げられていた。

「やつと着きました。」

「結構、遠かったな。」

『疲れました。』

三者三様の感想を口にしてしていると、遠くからトテトテと六才くらいの小坊主が駆けてきた。

「お客さんですか？いらつしやいま……」

「俺は小学生までなら男の子でもイケるぜ。」

そう不穏な言葉を口にする、小坊主はくるりと踵を返し寺の本殿へ入ってしまった。

「なに怖がらせてるんですか。」

水子ちゃんが非難の目を向ける。

「シヨタはシヨタで、趣がある。」

「黙っていてください。」

水子ちゃんが先頭に立って俺たちも本殿に向かう。

すると、先ほどの小坊主が、木の枝に編み込んだ紙を何本も付けているお祓い道具を持って立っていた。

「じゃじゃじゃ、邪神……」

よく見ると小刻みに震えていた。

「確かにマコトさんは邪ですけど、神ではないですよ。」

水子ちゃんは怖がる小坊主の頭を安心させるように撫でる。

「邪とは失礼な。シヨタもロリも愛するということは、広い心と純粋な精神を持ち合わせていなければならないのに……。」

俺のそんな言い分を意に介さず、水子ちゃんは数十分をかけて小坊主を慰めたのだった。

羨ましい。俺も美少女に頭なでなでしてもらいたい!!

4ツ目 貧乳はステータスだ！希少価値だ！文化遺産だ！ 比類のない名品だ！

水子ちゃんに慰められて、落ち着いた小坊主は俺たちを住職の元に案内してくれた。

「ちなみに俺は自分で自分を慰めるのが得意だ。」

「そろそろ口を縫いますよ？」

水子ちゃんは口をへの字にして言う。

ああ、怒った顔も素敵だ。

「ところで、それ、大麻ですよね？」

水子ちゃんが小坊主に尋ねる。

「はい。寺の備品です。榊の枝を使ったものです。」

そう言っつて、先ほど俺に向けた、木の枝に紙垂をつけたお祓い道具を見せる。

「よく、テレビとかで、祈祷師が『ほんにやら〜』とか言いながら振ってるヤツだよな。大麻って言っただ。」

「はい。でも、この袈裟は神道で用いられるものですから、なんで寺の小姓が持っているのか気になって。」

ああ、そうか。仏教徒が神社とかで使う道具を持っていたら変だよな。

「他の寺にお邪魔したことがないのでボクには詳しく分かりませんが……・……・珠円寺は神仏習合の関係で建てられたと聞いていますので、その影響かと思えます。」

小坊主は答える。

「神仏習合？」

聞いたことがない単語だ。

「学校で習いませんでしたか？明治維新まで日本では神と仏の区別が曖昧だったんですよ。もちろん、しっかり区別してる寺社も多かったです。そうですね……・……・修験道がいい例かもしれません。」

「ごめん。水子ちゃんの言っつてることが半分も分からない。」

「そんな難しいこと言っていないですよ。」

数学の天才は日本史の天才でもあるのか……。

「俺は……」

「保健体育の専門だ、とか言ったら怒りますよ。」

拜啓・真二君。君の妹のツッコミが早くなってきました。私は少しさみしいです。

数十分後。

小坊主に案内された俺たちは大広間で住職の話を聞いていた。

「院照は使いに行かせてしまったの……。帰ってくるのは明日の朝になるんじゃない。」

住職は還暦を迎えたくらいに見える初老のじいさんだ。

「そうですね……。今日のうちに話を付けておきたかったのですが……。」

水子ちゃんは残念そうに言う。

「することがないのなら、今日は移動で疲れましたし、早めに休みましよう。」

腕時計を見ると針は六時を指していた。

「栗さんに賛成。俺はもうクタクタだぜ。」

「うむ。では、夕食にするかの。仕度を手伝ってくれんか？」

「はい。」

『喜んで。』

「え〜。(> <)」

俺だけが露骨に嫌そうな顔を見ると、

「マコトさん、一緒にお料理しましょうよ。」

『楽しいですよ。』

水子ちゃんと栗さんがフォローしてくれる。

でも、正直、料理は苦手なんだよな。一人暮らしの俺だが飯はだいたいが出来合いのものだ。

自分の不器用さに改めて悩んでいると、住職が手招きしてきた。
なんだ？

「これを見てくれんかの？」

住職は小声で、水子ちゃん達の死角になるように懐から何かを取り出す。

「エプロン……ですか？」

それはレースの付いた可愛いエプロンだった。

「そうじゃ。料理をする時、その二人にはこれを着てもらおう。」

「はあ？」

料理の時エプロンを付けるのは当然じゃないか？

俺が首をかしげていると、住職はくわあ、と目を開く。

「お主は、エプロンを付けた美少女の萌えが分かるのか！！！！！！」

「な、な……」

言われてみれば、男性が女性に魅力を感じるアイテム上位にエプロンはランクインされている。家庭的で夫に尽くす妻を連想させる魔性の道具。加えて、ほとんどが既製品であるがゆえに自分の体格に合わないものを着ている人は多い。これは男性のワイシャツを着ることと同様、サイズが合わない服を着る萌えに通じる。

こ、この住職、なかなかやりおる。

「ブラザーと呼ばせて下さい。」

「同志よ。」

俺たちは堅い握手をかわした

5ツ目 盗撮をやめて料理の手伝いをしろだど？いいぜ。盛るぜえ〜超盛るぜ。

とんとんとん、と軽快なリズムで雫さんはタマネギを刻きんでいる。アニメのキャラクターの入ったエプロンを着ている雫さんは、どう見ても小学生が家庭科の授業をしているようにしか見えない。だが、手際は玄人てきわとしか思えないほどスムーズだ。

一方、水子ちゃんは中学生らしい手つきでジャガイモを剥むいている。

その様子をもっと近くで見ようと俺は水子ちゃんに近づく。

「あの？マコトさん？」

すると、水子ちゃんは包丁を置きこちらを振り向く。

「何か？」

「なんでカメラを持っているんですか？」

「可愛い二人を記録に残すため。」

「本気でやめて下さい。」

水子ちゃんは顔をしかめる。

だが、俺の熱いパトスはそんなものじゃ挫くけない。

「この写真をもとにトレーディングカードを作るぜ。」

「技術の無駄使いですね。その労力を別の方面に向けられないのですか？」

「これを〜こうして〜」

「聞いてない！？そして、さっそく作ってる！？」

「………てってて〜、完成〜〜〜〜。」

「早っ！」

【杉下水子】を召喚。

そう言っつて水子ちゃんの写真が入ったカードを机の上に置く。

「私はモンスター扱いなんですな。」

【効果】相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

「チート！？私そんな破壊的なキャラじゃないですよ。」

「少なくとも、俺は水子ちゃんの可愛さでノックアウトです。」

「その後、相手の墓地からモンスターを一体選択し、召喚条件を無視して自分フィールド上に特殊召喚する。」

「幻魔の扉じゃないですか。パクリはダメですよ。」

「女の子が遊戯王を知っていることに俺は驚きだ。」

「じゃあ、ヴァンガードでいこう。」

「そういう問題じゃないんですが……。」

「変態住しよ……もとい同志よ。ヴァンガードしようぜ。」

昔懐かしの銀塩カメラで栗さんを隠し撮りしている住職を呼ぶ。

「ふむ。よかろう。」

住職は仁王立ちして叫ぶ。

「イメージしろ！若妻との新婚生活を……！」

「仏道に入っている人間がこんなに煩惱まみれで良いんですか？」

水子ちゃんのツツコミはもつともだ。

「だが、その妄想、嫌いじゃないぜ。」

俺はフツとハードボイルドに笑い、放送禁止用語が飛び交うボ-

イズトークに突入しようとする。

すると背中をちよんちよん、と叩かれる。

「なにか？」

『料理の邪魔なので別の場所でやってください。』

栗さんがホワイトボードを見せながら睨んでくる。

「ふう、って頬を膨らました栗さんも可愛いなあ。」

「くらくら。」

水子ちゃんは懲りない俺の耳を引っ張る。

しょうがないんだ。幼女に叱られると興奮するんだから。

水子ちゃんに、生臭住職と一緒に台所から追い出されてしまっ。

「しょうがない。ロリ少女達の手料理を待ちますか。」

「そうじゃの。それはそれで楽しみじゃな。」

「そして、食事の後は……風呂……！」

「ビックイイベントじゃあああああ。」

おい、じーさん歳を考えろや、ポツクリ逝くぞ、と注意したくなるほどに住職のテンションは上がる。

「ちなみに、覗ける場所は？」

「あるに決まっておろう。」

決まってるんだ……。

「だが、ナイスだ。」

呆れながらも変態同士、拳こぶしをぶつけ合う。

だいたい、美少女の風呂は覗かない方が失礼だ。うん。俺は間違っていない。

……
……
……

「何か寒気がしました。」

『変態が編隊を組んで、よからぬことを企たくらんでいるんでしょう。』

6 ヅ目 この幻想郷では常識に囚われてはいけないので・・・(カット)

夕食をおいしく頂いた俺は、水子ちゃん達もおいしく頂くこと画策する。

さしあたっては、覗きを行う！

なにやら、発想が犯罪者じみてきた気がするが、おそらく気のせいだろう。

「なあ、住職。本当にここでいいんだよな。」

「もちろんじゃ。」

俺は変態住職とともに境内の松の木の上に来ていた。

「この寺には露天風呂があつての。ここからなら、まるっと、すべて見える。」

そう言つて住職が指をさした方向を見ると確かに湯気の上がつている一角があつた。

俺たちは双眼鏡と一眼レフカメラを取り出す。

双眼鏡をみながら桃源郷の景色を待つ。なかなか風情があるものだ。

俺のはこの旅行のために買った最新型だが、住職のものは大分使込まれている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・覗き用の双眼鏡が使込まれている・・・・・・・・この人重犯だな。捕まったら余罪が百くらいありそうだ。」

俺は知的好奇心からこんなことを聞いてみる。

「他にはどんな場所で覗いてるんだ？」

「主に高校のプールかの。スク水は女性を美しく見せるアイテムじゃ。」

「なるほど。」

だが、俺はスク水に萌えない。

高校の部活のコーチだし、どうにも学生アイテムに萌えを感じないのだ。制服とかな。

「しいて言うなら白スクの方が好きだな。水に濡れた時の妖艶よっえんさが違う。」

「なんと！紺スクの良さが分からないとは嘆なげかわしい。徹底討論じや！」

こうして俺たちは女性水着について語り明かす。実に有意義な時間である。

そんなことをしていると、ガラリと露天風呂のドアが開く音がした。

「いよいよじゃの。」

「じくじり。」

俺は生唾なまつばを飲み双眼鏡を目に当てる。

そこに写っていたのは……

美しい腹斜筋ふくしやきん。鍛え抜かれた上腕三頭筋じょうわんさんとうきん。石のような脛脛ふくろね……

ボディビルダーの皆様がそこにいた。

「ぎあああああああ。」

あまりの悲惨な光景に住職が悲鳴をあげる。

ちくしょう！なんでこんなことになっただんだ！

桃色風景を期待していただけにダメージが大きい。

「おお、目が……目があ……」

住職は目を押さえ痙攣けいれんしている。

「救護班ウウウウウウ。」

俺は叫ぶ。早く救護しないと。もう、住職のライフはゼロだ。

俺も、すぐに肉体美を見せつける友人がいなければ危ないトコロだった。

心の中で東京にいる真二君に感謝しつつ、筋肉ダルマどもに向かって怒鳴る。

「てめえら、なんてモン見せやがる!!!!!!!!!!」
もう秘密行動ひみつなんてお構いなしだ。

自分がノゾキをしていたことを棚に上げて怒る。それほどヤツらの罪は重い。

「住職が昇天するところだったんだぞ!」
隣で嘔吐している住職を指さしながら言う。

すると、男たちは俺を見ながら何やら互いに話しだす。

「なんだ?」

俺はあまり見たくないが、再びふたたび双眼鏡を手に取り、ヤツらの唇を読む。

なんて言っているんだ?

あ・ら・い・い・お・と・こ

その言葉を理解した瞬間、産毛うぶげが逆立つのが分かった。

これはマズイ。この人達、ホモさんだ。冷や汗が止まらない。

「おい、逃げる・・・ぞ?」

俺は全身に鳥肌が立つのを感じながら、住職に向かって言う。
しかし、隣にいたはずの同志の姿が見えない。

まさか、もう拉致された!

と、最悪の事態を想像しようとした瞬間肩に手が置かれる。

その手はともごつく、続いて野太い声が耳に届く。

「ヤ・ラ・ナ・イ・カ?」

「アーーーーー」。

.....
.....
.....

「風呂上がりのマッサージは気持ちいですう……。」

「まさかお寺に露天風呂やマッサージチェアがあるとは思いませんでした。」

「結局、露天風呂には行けませんでした。」

「まあ、覗かれそうな場所にわざわざ行くのも馬鹿げた話ですし。」

「今は雫さんの呼んだ警備員さんがいるんですよね？」

「はい。きっと天罰が下っていると思いますよ。」

7ツ目 一人暮らしが長いと誰かに起こしてもらいたくなる。

ただし、美少女

翌朝。

「う~~~~ん。」

俺は悪夢にうなされていた。

昨日は危うくホモさんと熱い一夜を過ごすところだった。
貞操ていそうを守った自分を褒めてほしい。

しかし、筋肉集団に抱きつかれた心的外傷トラウマは夢にまで登場した。

「お、俺はノンケだ・・・や、やめ・・・うあ・・・」

そんな寝言を言っていると隣に誰かが立つ気配がする。

悪夢のせいで眠りが浅かった俺は近づいてくる足音で、少しだけ
覚醒した。

杉下邸ではメイドさんに起こされたことで、起床イベントをどこ
かで期待してしまう自分がいた。

足音は俺の寝ている布団の隣で止まり、ゆらゆらと俺を動かして
くる。

「起・・・て・・・る・・・起き・・・」

まだ、完璧に起きていないせいかわ声が遠く聞こえる。

それでも俺はなんとか十分の一ほど目を開く。

そこには、

「起きて欲しいでござる。」

.....忍者がいた.....

覆面を付けた。それはもう、日光江戸村にいそうなくらい黒装束
で。

「.....」

「.....」

俺と忍者はしばらく見つめ合う。

「……………うつと……………zzzzz。」

「ちょ、おま！眠らないで下さいでござるー！」

忍者は叫ぶ。

……………うつさい。

「おい、えせ忍者。よく聞け。起床というのはエロゲでは重要かつ至高のイベントなんだぞ。朝起こしてくれる人間はメイドと幼馴染に限る。」

まったく。朝、男に起こされるゲームはホモゲーだけだ。

……………少し昨日の悪夢を思い出してしまっではないか。

「理不尽でござる！拙者にどうしろと！？」

忍者がギャーギャ騒ぐ。

「なら、くノ一なら許容範囲だ。認める。」

「メチャ、上から目線でござるね。」

「攻略対象に朝立ちを見せるのは必須だろう。」

「何を常識みたいに言っているのでござるか！？というか、今の発

言、言、(ピー)音入れる必要ありませんぞ。」

「夕立は風流だけど、朝立ちは下ネタになるとは、これいかに。」

「落語！？せめて、もう少し遠まわしの表現で頼むでござる。」

「そそり立つ肉男爵。」

「わーわー」

あまりにヒドイ発言に忍者はガヤをかぶせてくる。

確かに今の俺は少し暴走気味だ。少し冷静になろう。

「だいたい、なんで忍者がいるんだ？」

「そのツツコミが遅いでござる。」

仕方ないだろ。俺の周りには変人が一杯だから、いいかげん耐性がついてきた。

「拙者の名前は院照。水子殿の友人にして、この珠円寺の坊主であります。」

おお、こいつが院照か。

俺は上から下まで舐めるように見つめる。全身黒ずくめで顔はよく分からないが、身長は一九〇ほどあるだろう。なかなか迫力がある。本当に十八か？ご丁寧に模造刀までさしている。

「うむ。」

俺は、頷いて一言。

「キャラが弱い。」

「え〜〜。」

院照は目を白黒させている。

忍者キャラって古今東西多いし、口調も『ござる〜』のみでアクがない。

「モブキャラ決定」

「さらりとヒドイこと言われた!?!」

たまに忍者口調じゃなくなるし。

数学が得意だから院照いんてゐるつても安直だ。

「中途半端なんだよな。存在が。」

「存在から!?!?!?!?!朝食の準備ができたから呼びに來ただけなのに、どうしてこんなに罵倒ばとうされなきゃならないんでござる……」

あ、そうだったのか。

「それは悪いことをしたな。さっそく飯にしよう。」

そう考えたら腹も減ってきた。

「……まあ、忍者は隠密であるし……目立たないのがいのでござるが……」

しかし、俺が布団から起き上っても院照はぶつぶつと何かを呟いていた。

8ツ目 あなたの名前はダンリックではないのだ、あなたの名前は……えっと

朝食を食べ終わると、水子ちゃんは「兄に電話してきます。」と言って席を立った。

ちなみに朝食の準備も水子ちゃんと雫さんでやったそうだ。

朝飯もうまかったなあ。

「水子氏から事情は聞いたでござる。」

食後の一休みをしている俺に向かって院照は言う。

「拙者の矜持きやうじとしては、影に生きるこの身を白日はくはつの下にさらすのは度どし難く、断つてしかるべき頼みごとであります。」

厨二病をこじらせてるのか？

素直に「手伝いたくない」と言えないのか？

「しかし、他ならぬ友人である水子殿の頼みであるゆえ、拙者も出来る限り協力させてもらうでござる。悪は断罪しますぞ。」

「おお！本当か！？」

それは心強い。

前置きが長いが、基本的にいいヤツのようだ。

「でも、いい台詞せしつも黒装束くろまとうそくで言つと台無しだな。ふざけた格好かっこうをするな。」

「なっ！？これは拙者のアイデンティティーですよ！」

「忍者の格好をしてもキャラは濃こくならないぞ。」

「酷こくなる可能性があるでござる！」

「キャラが酷ひどくなって嬉しいか？」

「……………」

「どつせ、イン……なんとかさん、と呼ばれる身の上なんだ。潔しんく生きる。」

「院照でござるっ。」

少し涙目である。

『あまりいじめるのは感心しませんね。』

横目で見ていた雫さんが俺をたしなめる。

『私や水子ちゃんに接する態度で院照君と話せないのですか。』

『基本、男はどうでもいい。』

『この人ヒドイでござる！』

偽らざる本心いつわなんだけどな。

……だけど、確かに俺は朝から院照に対して暴言を吐いてばかりだ。

いつもなら、ポケにはさらなるポケをかぶせるのだが……。『忍者だと！？俺も気配を消す術を覚えて小学校に忍び込みたいでござる』弟子にして下せえ。『みたいに。』

不思議とそんな気分にならない。普段、心の奥底にある黒い部分をさらけ出しているようだ。

……なにか妙な感じがする。

『院照君、君の変人度は十分です。マコトさんが異常なんです。』
『そうなのか？』

『嬉しいでござるっ！』

俺は首をかしげるが、院照は感動している。変人と言われて喜ぶな。

……そう言えば、雫さんもなんかツツコミが激しい。

昨日の夕飯の時からか？

この前会ったばかりの人だが、見かけは子供、態度は大人、という人であると思っている。

料理の時、写真を撮ったくらいで頬ほおを膨ふくらませるとは考えにくく、覗き対策にホモさんを集める手段も雫さんらしくない。

そんな俺の疑問をよそに雫さんはつらつらと文字を書き続ける。

『まあ、昨日一日、普通人の水子ちゃんと一緒にいたからそう感じるのかもしれませんが。』

「……………」

「……………」

その言葉を読んで、水子ちゃんをよく知る俺と院照は沈黙した。

『え？なんなのですか？この空気。』

そんな様子を見て、雫さんはあたふたする。

「……だつてなあ……。」

「はい……。」

俺は院照に複雑な表情で目配せする。

水子ちゃんは素敵な人だけど、決して「普通」ではない。

『なにか、地雷踏んじやいました？』

「いや、大丈夫だ。問題ない……。」

俺は肩で息をしながら続ける。

「どちらかと言えば、問題なのは……ああ、そうか！」

「どうしたのでござるか？」

いきなり大声を出した俺に院照と雫さんは驚く。

「雫さん、昨日くらいから、なにかイライラしたり、自分らしくない行動をとったりしてない？」

『そう言われれば……。』

思い当たることがあるのか、雫さんは顎に手を当てて考える。

その様子を見て俺は確信をもつ。

9 ヅ目 伏線回収を開始する。そんな装備で大丈夫か？大丈夫だ、問題しかない

「マコトさんも人ならざるモノの力だと思えますか？」

「いいや、思わない。世の中にはまだまだまだ科学で解き明かせない謎があるが、この事件はそういった類じゃない。」

.....

「つて会話覚えてる？」

『真二さんの家でした会話ですね。』 (8話)

雫さんは思い出すようにホワイトボードに文字を書く。

「そうそう。神隠し事件は超常現象じゃないって話。」

『奇妙な会話だと思っただんです。まるで、非科学的なモノが存在していることが前提なような印象を受けました。』

「正解。」

俺は雫さんをなでなでする。

露骨に嫌そうな顔をされたので、手を放して説明を続ける。

「水子ちゃんと真二君の家・・・杉下家は、陰陽道を研究してきた家系なんだ。」

眉唾な話だからか、雫さんの手が一瞬止まる。

『二人は陰陽師なのですか？』

俺は首を振る。

「違う。杉下家の家系に霊力を持った人はいない。いや、いなかった。杉下家初の霊能力者が水子ちゃんなんだ。」

杉下家は頭のよい家系だった。それが、遺伝的なのか教育なのかは分からないけどね。真二君の曾祖父はその知識を陰陽道に向けた。

それが祖父、父へと受け継がれて、水子ちゃんて成果をあげた。

水子ちゃんは・・・降霊の巫女だ。」

『降霊・・・死んだ人の魂をのり移させる、という？』

「それぞれ。イタコの的な。」

『言われてみれば、寺に入った時に大麻おおぬまに興味を持ってましたね。神具に反応するのは霊能力があるからなのでしょう。』

「詳しいことはよく分らん。」

陰陽道について真二君に説明してもらったんだけどね。

難解で分からなかった。何回説明されても。

「マコトさんつまらないこと考えてませんか？」

「うお！」

びっくりした。地の文読まれた!?

真二君との電話を終えたのだろう。いつのまにか水子ちゃんが背後に立っていた。

「私の話をしていたんですか？」

「あ、ああ。」

別に悪いことを話していたわけじゃないのだが、口ごもってしまった。

「雫さん、私が霊能力者だと聞きましたか？」

水子ちゃんは雫さんの方に視線を向けて言う。

『はい。』

「ぶつちやけ、信じます？」

『正直信じがたいですが・・・マコトさんが嘘をつくとも思えませんが・・・。』

「そんなもんですよ。普通。」

「俺はすぐに信じたけどな。」

俺は水子ちゃんが霊能力者だと明かしてくれた数年前を思い出して言う。

「マコトさんは馬・・・いえ、考えなしの人ですから。」

・・・今、馬鹿から言い直した意味あった？

『ところで、水子ちゃんが霊能力者であることと、私がイライラしていることは関係はあるんですか？』

「水子ちゃんが降霊術を使うと周りの人の感情が乱れるんじゃないか

「たっけ？」

「うる覚えだが、そんな気がした。」

「なんか、リクツがあつて、以前水子ちゃんが説明してくれた気がするが、難しくてよく覚えていない。」

「陰陽っていうのは簡単に言つと『世の中のすべては陰と陽でできている』って考え方なんです。例えば、天が陽で地が陰。表が陽で裏が陰。これが、陰陽道のもとにある陰陽いんようの考え方です。」

「その考えでいくと、男が陽で女が陰、生者が陽で死者が陰になります。ですから、女である巫女は同じ陰の死者を呼びやすいのです。それで、私が陰である霊を集めると、周囲のモノが陰に変わりやすくなります。喜怒哀楽の怒哀は陰ですから、私が降霊術をしていると周囲にいる人は怒りやすくなったりします。」

「分かりましたか？」

「いいえ。全く。」

「マコトさんには聞いてません。」

「水子ちゃんは俺に説明するのを諦めたようだ。」

10ツ目 まさかお前、幽霊だろう!? 幽霊とはどんな効果だ? いつ発動す・

「私たちがイライラしているということは水子ちゃんは今、降霊を
しているということなんですか?」

俺とは違い水子ちゃんの説明を理解した雫さんは尋ねる。

「ええ。一応。」

「じゃあ、今は「杉下水子」ではない別人格なのですか?」

「そこが微妙なトコなんです。私は曾祖父そうそふの研究で人工的に巫女に
なったのですが、本来、イタコのような降霊者はそれなりの人徳が
必要です。」

降霊術にはコツクリさんを始め、一般人にも可能なものが数多く
あります。でも、そういつたもので呼び寄せられるのは動物霊や下
級霊、悪霊がほとんどです。上級霊を呼び寄せるにはそれに見合っ
た人物が呼ばなければなりません。

人工的に降霊をする私は中途半端な部分が多いんです。だから人
格を乗っ取られることもありません。しかし、出来ることも、降り
た霊を通じて普段なら見えないものが見えるくらいです。それは、
物の怪であつたり、人の心だつたりします。」

だから、地ちの文ぶんをよまれたりするのか。

「実は、今回の神隠し事件が物の怪たぐいの類しわざの仕業しわざだったら、私が何と
かしようと思つて付いてきたんです。」

そうだったのか。

「それで、やつぱり、この事件は人外じんがいの力が関係してそう?」

「さすがに一日じゃ分かりませんよ。」

水子ちゃんは苦笑する。

そりゃそうか。

「でも古都のせい
か霊は東京に比べて多いですね。」

「まじで?」

俺は慌てて周囲を見渡す。

「「どつぞどつぞ」

「ダチヨウ倶楽部っぽく流すのが正解だろう。今後の人生に。

「兄が東京で頑張ってくれています。だいぶ進展があったそうです

よ。」

「真二君が？」

「ええ。電話で様子を教えてくださいました。」

へ。

真二君はこの捜査にあまり乗り気でないように見えたんだけど。

。。

頑張ってくれてるんだ。

「じゃあ、向こうでの状況を教えてくださいる？」

「はい。」

俺も出来ることをしよう。

水子ちゃんに尋ねながら俺はそう決意を新たにした。

間章2 ここからは僕の提供でお送りします。

僕は携帯の画面をスクロールして『ま』行を出す。

p r r r r r r r r r . . . ガチャ。

「もしもし〜。こちら真二。」

「おはようございます。兄さん。」

「おはよ。水子^{みこ}。元気してる？」

「はい。一日で変化はないかと。」

「それもそうか。」

それでも、兄としては誘拐事件を調べに行っている妹を心配するのが当然だろう。

「相変わらずマコトさんはセクハラしてきますが。」

「あいつはもう埋めてしまえ。」

分かっていたことだがマコトさんにも変化はないらしい。

「むしろ、暴走具合が京都に来てから悪化してます。」

「. そんな気がした。」

「もし. 万が一、マコトさんが襲ってきたら目をそらさず大きな声を出せ。」

「熊ですか。」

「防犯ブザーを手放すな。」

「本当に不審者あつかいで. いや. 不審者ですね。あの人は。」

「まっただ。」

「栗さんの様子はどうだ？」

「別に変ったところはありませんよ。私の影響で少し本性を見せてくれてはいましたが。」

「もう降ろしているのか。」

「ええ。念のため東京駅から。でも、まだ引つかかるものはありませんが。」

「引つかかるものと言つと霊のこと？」

「はい。霊の様子は以前京都に来た時と変わりはありません。何かしら大きな力が府内で働いた可能性は低いです。」

「うん。そうか。」

「あ、でも雫さんの様子がどうも……。」

「雫さんが何か？」

「雫さんの感情なんですが……どうも変なんです。」

「変？」

「何というか……誘拐事件の被害者の心境じゃないんです。」

ほう？

「どういうことだ？」

「兄さんの知つてのとおり、降ろしている時、常に人の心が見えて
いる訳ではありません。ですから確実なことは言えませんが……
犯人に対しての恐怖心がないんです。普通、誘拐されそうになった
人は犯人……というより誘拐されそうになったという事実には恐怖
するはずです。女の人なら尚更なおよさらです。でも雫さんにはそれがありま
せん。事件を調べている時にも犯人のことを考えて敵愾心てきがいしんを見せる
ことはあつても、怖いという感情は出てきません。」

「それは……興味深いな。」

「ええ。」

「東京で調べた分かつたことと合わせると納得いく答えが出るかも
しれない。」

「本当ですか!？」

「ああ。水子達が京都に行った後俺なりに色々調べたんだ。聞いて
くれ。」

？話 メールより電話派です。（前書き）

↓ここからの主な登場人物↓

すぎした すぎした 真二 しんじ…美男子で文武兼備で大企業の御曹司という高スペック人間だが、性格が残念。
いんてる 院照…珠円寺の坊主。真二の前でのみ本性を出す。普段は忍者のコスプレをしている。
くが 久我静左衛門 せいざえもん…神隠し事件の容疑者。マコトが立ち上げた『未成熟な女兒を見守る会』に所属していた。

?話 メールより電話派です。

マコトさん達が京都に着く数時間前……僕は研究レポートを仕上げている。

レポートの出来は今一つ納得できるものではない。

……どうにも事件のことが気になって集中できなかった。

一番の心の突っかかりは水子みこのことだ。

正直、心配だ。シスコンと思われるかもしれないが、事件を追う妹が危険な目に遭っていないか気にかかる。

「うん。」

僕は腕を組んで考え込む。

とりあえず、珠円寺に連絡を入れて院照に水子達を危険な場所に連れて行かないように言っておこう。

そう思い立つたら、携帯を取り出し番号を押す。

p r r r r r r r r r r

数回のコール音の後、声が聞こえる。

「もしもし。」

「こんにちは。僕は杉下真二といいます。院照君はご在宅でしょうか？」

「おお。真二君か。久しぶりじゃの。」

「あ、住職でしたか。お久しぶりです。」

名乗ると気さくな返事が返ってくる。

僕と珠円寺の住職とは顔見知りである。

水子が院照に会いに京都に行った際に世話になるので、保護者として挨拶を交わす程度であるが。

「今回も水子がお世話になります。」

宿泊の約束はもう水子がしている。

「なんのなんの。こちらとしても若い子の元気な姿を見ると（性的な）活力になるんじゃない。」

「・・・なんでだろう？今の一言に若干の不安を覚えた。」

「それで、院照君をお借りしたいという話なんですけど・・・。」

「ああ、それも聞いとる。構わんぞ。修行中の身じゃが、頭はよう切れる。神隠しを調べるらしいが、力になるじやろう。」

「ええ。有難いです。それで、少し院照君と話したいんですが・・・。」

「あゝ・・・うむ・・・スマンの。」

住職は申し訳なさそうに続ける。

「院照は今出かけておる。東京に出とるんじゃない。ちよつとした使いでの。明日の朝には戻るから事件の協力するのじゃが・・・。」
「そうなのか・・・。どうしようかな？」

「東京つてコトは僕と会うことはできませんか？」

「おお。そうか。その手があったか。最近年で単純なことを見落としてしまうの。」

「じゃあ・・・。」

「ああ、今から院照の携帯の番号を言うから連絡をとってくれんか？」

「わかりました。」

「え〜と・・・うむ・・・最近、近目での・・・あゝ
0・・・8・・・」

ただだどしく住職は番号を言う。

僕はその番号を憶えると住職に礼を言い、携帯を切る。
そのまま憶えたばかりの番号を押す。

p r r r r r r r r r r r r r r r

「はい。もしもし。」

院照らしい若い声が返ってくる。

「やあ。院照。杉下真二だけど、番号あつてる？」

「あ、真二さんですか。どうも。大丈夫ですよ。」

よかつた。住職の教えてくれた番号に一抹いちまつの不安があつたから。

「住職から番号を聞いたんだけど、今東京にいるんだって？」

「はい。寺から歴史的価値のあるものが発見されたとかで、その鑑定に。」

「そんな事情だつたんだ。」

「はい。今、鑑定をしてもらっているところです。」

「あ、じゃあ、電話はまづかつた？」

「いえ。鑑定には時間がかかるんで、町をぶらついているところで。だから平気です。」

「ということは今暇なの？」

「はい。」

ふむ……。ならば……。

「じゃあ、少し俺に付き合ってくれない？」

「構いませんよ。」

「今ドコにいるの？」

「上野です。駅の近くです。」

なんだ。大学の近くじゃないか。

「わかつた。車で向かうから、そこにいてくれ。」

僕は午後の授業はサボることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8619v/>

なんで僕の周りには変人と変態が集まるのだろう？

2011年11月13日03時22分発行